看護学生の対人関係能力に関する研究
― 看護学臨地実習前と精神看護学臨地実習修了後との比較による検討 ―
（第２報）

日　下　知　子，曽　谷　貴　子

A Study of Nursing Students' Interpersonal Relationship Ability
― A Comparative Examination of the Ability before Specialized Nursing Study Practice with that after Psychiatrical Nursing Study Practice ― (Part 2)

Tomoko KUSAKA and Takako SOGAYA

キーワード：対人関係能力，臨地実習経験，属性

概　　要

本研究では，患者－看護師関係を保ちながらケアを推進する上で，臨地実習において看護学生が獲得していく対人関係能力を社会的スキルの概念で捉え，第一に，前回の報告[1]とは違う対象を扱うことにより，実習経過および専門分野における看護学臨地実習（以下，看護学臨地実習と略す）経験との関連を検証すること，第二に，看護学臨地実習前と精神看護学臨地実習（以下，精神看護学実習と略す）後との前後の比較をすることによってその変化過程を検討することを目的とした．看護系短期大学２年課程１校の看護学生54名に対し，看護学臨地実習前と自己を客観的に捉えることのできる機会としての精神看護学実習修了後を取り上げ，属性に関する項目，対人関係能力を示す社会的スキルからなるアンケート調査を実施した．その結果，看護学生の看護学臨地実習前および精神看護学実習後の対人関係能力には，過去の精神看護学実習経験が関係しており，看護学臨地実習前よりも精神看護学実習後において高く，なかでも初歩的なスキルおよび高度なスキルにおいて変化が見られた．この結果から，看護学生への対人関係に対する教育を効果的に行うには，過去の学習経験や学生のもつ社会的スキルの変化過程の特徴を理解した上で，教育内容を検討することの必要性が示唆された．

１．緒　　言

看護が実践の科学である以上，臨地での実習なくしては看護の専門職を育成することは困難である．臨地実習は，看護の基礎教育において欠かせない，人を対象とする専門的な授業[2]であり，特に，精神看護学実習において学生達は，精神看護が実践されている場に身をおき，対象と自己との相互関係を通じて，人間関係を形成する過程をたどりながら，自己を冷静に振り返る機会[1]を得ることによって，より適切なかかわり方を学ぶことができる．

そこで，本研究では前回の調査[1]をもとに学年のもつ特性差の可能性をふまえ，対象を変えて調査を行うことにより，一つには実習経過および専門分野の看護学臨地実習経験との関連を検証すること，二つ目には看護学臨地実習前と精神看護学臨地実習後との前後の比較をすることによってその変化過程を検討することを目的とした．

（平成18年９月28日受理）
川崎医療短期大学　第一看護科
The First Department of Nursing, Kawasaki College of Allied Health Professions

２．研究方法

１）研究デザイン

精神看護学実習修了後の対人関係能力と属性，本カリキュラムにおける臨地実習内容および看護学臨地実習前の対人関係能力との相関関係を検証する．

２）対　象　者

Ｏ県内の看護系短期大学２年課程１校の学生で，精神看護学の講義後に精神看護学実習を終了した54名を調査対象とした．回収された54名（回収率および有効回答率100％）を分析対象とした．

３）調査と時期

(1) 調査期間

2005年4月11日～10月15日

(2) 調査方法

調査用紙は，7専門分野の看護学臨地実習前および精神看護学実習修了時に精神看護学実習の振り返りの一部として，直接，本人に手渡し，一週間以内に各自が教員に提出する方法をとった．

(3) 倫理的配慮

倫理的配慮として，学生に研究目的と方法，個人が特定されないことおよび実習評価に結びつくものではないことを口頭で説明し，調査に同意のあった対象者のデータを採用した．

(4) 質問紙の構成内容

質問は属性として年齢，准看護師教育課程における精神看護学実習経験の有無およびレクリエーション企画の有無を，本カリキュラムにおける臨地実習内容として各専門分野の看護学臨地実習経験の有無と精神看護学実習の期間を，対人関係能力として社会的スキル測定尺度18項目で構成した．

＜社会的スキル測定尺度＞

看護学生の対人関係能力を測定するために，Goldstein, A.P.[3]開発した社会的スキルを基に，菊池[4]が開発した社会的スキル測定尺度（KISS－18）を用いた．菊池[4]によると社会的スキルとは「対人関係を円滑にはこぶために役立つスキル（技能）」と定義されており，①初歩的なスキル②高度のスキル③感情処理のスキル④攻撃に変わるスキル⑤ストレスを処理するスキル⑥計画のスキルといった6種類の分類をもとにして，若者にとって必要な社会的スキルを測定する18項目にて構成されている．回答は，「いつもそうだ」（5点）から「いつもそうでない」（1点）までを合計点で算出する5件法で，得点が高いほど対人関係技能が高いことを示す．この尺度のクロンバックα係数は菊池[4]の報告ではα＝0.83であった．なお，学生には，計画のスキルに該当する項目9．12．18の「仕事」を「臨地実習」に置き換えて解釈するように説明を加えた．

(5) 分析方法

分析は，統計学パッケージ SPSS11.5J for Windows を用い，危険率5％未満を有意水準とした．各変数間の相関分析には，Pearson の積率相関係数を用い，要因別の平均値の差の検定には2群間で対応のないt検定を，3群間以上では一元配置の分散分析を行い，臨地実習前後の平均値の差の検定には対応のあるt検定を行った．

3．研究結果

1）調査対象の属性

分析対象に関する属性は，Table 1に示す．全学生の平均年齢は，20.6歳（SD 3.0）であり，精神看護学実習における平均実習期間は10.56日（SD 0.8）であった．

過去に，准看護師教育課程においてどのような精神看護学臨地実習を経験したかの問いに，臨地実習の経験があると答えた者は26名（48.1％）と半分に満たず，そのうち，精神科外来あるいは精神科病棟での実習経験と施設見学実習の経験がある者が18名（33.3％），施設見学の経験のみである者が8名（14.8％）であった．そして，レクリエーション企画の経験がある者は8名（14.8％）とわずかであった．

各専門分野の看護学臨地実習の経験では，成人急性期看護15名（27.7％），成人慢性期看護7名（12.9％），小児看護39名（72.2％），母性看護31名（57.4％），老年看護46名（85.1％），在宅看護23名（42.5％）であった．

2）KISS－18の平均，標準偏差，信頼性係数

尺度は，看護学臨地実習前において range 32－70，M＝55.7（SD 7.9），信頼性係数αは0.86，精神看護学実習後において range 34－75，M＝58.0（SD 8.2），

Table 1 分析対象の属性（N＝54）

		M	SD
年齢		20.6	3.0
精神看護学実習期間（日）		10.5	0.8
		N	%
過去の精神看護学実習経験	あり	26	48.1
精神科外来・病棟実習と見学実習		18	33.3
施設見学実習のみ		8	14.8
	なし	28	51.9
レクリエーション企画経験	あり	8	14.8
	なし	46	85.2
各領域看護学実習経験			
成人（急性期）看護学	あり	15	27.7
	なし	39	72.3
成人（慢性期）看護学	あり	7	12.9
	なし	47	87.1
小児看護学	あり	39	72.2
	なし	15	27.8
母性看護学	あり	31	57.4
	なし	23	42.6
老年看護学	あり	46	85.1
	なし	8	14.9
在宅看護学	あり	23	42.5
	なし	31	57.5

M；平均，SD；標準偏差，N；人数

Table 2　過去の精神看護学実習経験別にみた看護学臨地実習前および精神看護学実習後の対人関係能力の平均値およびｔ検定結果（N＝54）

分　類	実習経験あり（N＝26） M（SD）	実習経験なし（N＝26） M（SD）	t 値
看護学臨地実習前			
Ⅰ初歩的なスキル	9.4(2.4)	9.6(2.0)	
Ⅱ高度のスキル	9.2(1.9)	9.8(1.4)	
Ⅲ感情処理のスキル	8.5(1.6)	9.8(1.2)	t＝−3.14**
Ⅳ攻撃に代わるスキル	8.6(1.8)	9.6(1.2)	t＝−2.38*
Ⅴストレスを処理するスキル	9.3(2.0)	9.4(1.2)	
Ⅵ計画のスキル	8.7(1.8)	8.9(1.5)	
（全項目）	53.9(9.0)	57.4(6.4)	
精神看護学実習後			
Ⅰ初歩的なスキル	10.1(2.2)	10.1(2.1)	
Ⅱ高度なスキル	9.6(1.8)	10.6(1.2)	t＝−2.33*
Ⅲ感情処理のスキル	9.1(1.5)	9.8(1.6)	
Ⅳ攻撃に代わるスキル	9.2(1.7)	9.7(1.2)	
Ⅴストレスを処理するスキル	9.1(1.9)	9.7(1.9)	
Ⅵ計画のスキル	8.8(1.6)	9.6(1.8)	
（全項目）	56.19(8.1)	59.7(8.1)	

M；平均，SD；標準偏差，N；人数，**p<0.01，*p<0.05

Table 3　看護学臨地実習前と精神看護学実習後の対人関係能力６分類別のｔ検定結果（N＝54）

分類	質問項目（18項目）	range	M（SD）	t 値
Ⅰ初歩的なスキル （実習前 α＝0.73 実習後 α＝0.72）	1．他人と話していて，あまり会話が途切れないほうですか 5．知らない人でも，すぐに会話が始められますか 15．初対面の人に，自己紹介が上手にできますか	実習前３-14 実習後５-14	実習前9.5(2.2) 実習後10.1(2.1)	t＝−2.63*
Ⅱ高度のスキル （実習前 α＝0.45 実習後 α＝0.36）	2．他人にやってもらいたいことを，うまく指示することができますか 10．他人が話しているところに，気軽に参加できますか 16．何か失敗したときにすぐに謝ることができますか	実習前６-13 実習後５-14	実習前9.5(1.6) 実習後10.1(1.6)	t＝−3.04**
Ⅲ感情処理のスキル （実習前 α＝0.33 実習後 α＝0.46）	4．相手が怒っているときに，うまくなだめることができますか 7．こわさや恐ろしさを感じたときに，それをうまく処理できますか 13．自分の感情や気持ちを素直に表現できますか	実習前６-12 実習後５-13	実習前9.2(1.6) 実習後9.5(1.6)	
Ⅳ攻撃に代わるスキル （実習前 α＝0.64 実習後 α＝0.63）	3．他人を助けることを，上手にやりますか 6．まわりの人たちとの間でトラブルが起きても，それを上手に処理できますか 8．気まずいことがあった相手と，上手に和解できますか	実習前５-13 実習後５-13	実習前9.1(1.6) 実習後9.5(1.5)	
Ⅴストレスを処理するスキル （実習前 α＝0.60 実習後 α＝0.71）	11．相手から非難されたときにも，それをうまく片付けることができますか 14．あちこちから矛盾した話が伝わってきても，うまく処理できますか 17．まわりの人たちが自分とは違った考えをもっていても，うまくやっていけますか	実習前４-13 実習後４-13	実習前9.3(1.6) 実習後9.4(1.9)	
Ⅵ計画のスキル （実習前 α＝0.67 実習後 α＝0.69）	9．仕事をするときに，何をどうやったらよいか決められますか 12．仕事の上で，どこに問題があるかすぐに見つけることができますか 18．仕事の目標を立てるのに，あまり困難を感じない方ですか	実習前５-12 実習後５-14	実習前8.8(1.6) 実習後9.2(1.8)	
（全項目） （実習前 α＝0.86 実習後 α＝0.88）		実習前32-70 実習後34-75	実習前55.7(7.9) 実習後58.0(8.2)	t＝−2.40*

M；平均，SD；標準偏差，N；人数，**p<0.01，*p<0.05

信頼性係数 α は0.88であり，使用した尺度は適当な内的整合性を備えていると判断できる．

3）看護学生の対人関係能力と属性，実習経過および専門分野の看護学臨地実習経験との関連

(1) 対人関係能力と属性との関連

准看護師教育課程における精神看護学実習経験別にみた看護学臨地実習前および精神看護学実習後の対人関係能力の平均を Table 2 に示す．看護学臨地実習前では，准看護師教育課程において精神看護学実習経験がある者（N＝26）の平均得点は，53.9点（SD 9.0），実習経験のない者（N＝28）の平均得点は57.4点（SD 6.4）であった．そして，6分類した対人関係能力のｔ検定の結果においては，感情処理のスキル（ｔ＝−3.14，$p<0.01$）および攻撃に代わるスキル（ｔ＝−2.38, $p<0.05$），精神看護学実習後の高度のスキル（ｔ＝−2.33，$p<0.05$）に有意差を認めた．精神看護学実習後では，准看護師教育課程において精神看護学実習経験がある者（N＝26）の平均得点は，56.1点（SD 8.1），実習経験のない者（N＝28）の平均得点は59.7点（SD 8.1）であり，6分類した対人関係能力のｔ検定の結果，高度のスキル（ｔ＝−2.33，$p<0.01$）において有意差を認めた．しかし，レクリエーション企画経験のある者（N＝8）とない者（N＝46）については有意差を認めなかった．

(2) 対人関係能力と実習経過および専門分野の看護学臨地実習経験との関連

精神看護学実習後の対人関係能力と実習経過との関連については，1から7領域の専門分野修了に伴い，6分類した対人関係能力がどのように変化するのかを調査するために分散分析を行った結果，有意差は認めなかった．次に，専門分野の看護学臨地実習経験との関連については，どの専門分野との関連があるかを調査するために，ｔ検定を行った結果，どの専門分野においても有意差を認めなかった．

4）看護学臨地実習前と精神看護学実習後との比較

看護学臨地実習前と精神看護学実習後の対人関係能力の平均を Table 3 に示す．看護学臨地実習前の平均得点は55.7点（SD 7.9），精神看護学実習後の平均得点は58.0（SD 8.2）であり，ｔ検定の結果，有意差を認めた（ｔ＝−2.40，$p<0.05$）．次に，6分類した対人関係能力では初歩的なスキル（ｔ＝−2.40，$p<0.05$）と高度のスキル（ｔ＝−2.40，$p<0.05$）においてその差を認めた．

5）項目別にみた看護学臨地実習前と精神看護学実習後の看護学生の対人関係能力の特徴

臨地実習前後において，有意差を認めた質問項目（Figure 1）は，項目4「相手が怒っているときに，上手くなだめることができますか」（ｔ＝−3.03，$p<0.01$），項目5「知らない人とでも，すぐに会話が始められますか」（ｔ＝−2.09，$p<0.05$），項目10「他人が話しているところに，気軽に参加できますか」（ｔ＝−3.55，$p<0.01$）の3項目であった．

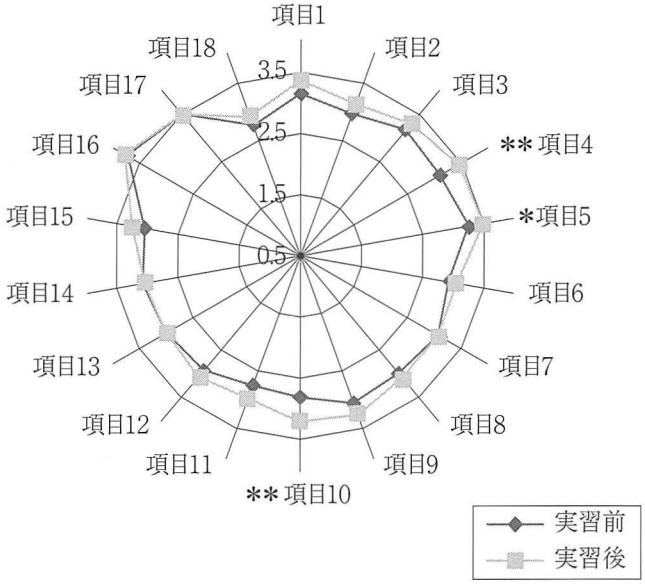

Fig. 1 項目別に見た看護学臨地実習前と精神看護が学実習後の社会的スキルの比較

4．考　　察

初めに，本研究における分析対象に関する属性については，年齢は一般の大学生とほぼ同年齢であり，精神看護学実習における平均実習期間では，カリキュラム改正後の多くの調査報告[5,6]と同様に臨地実習を2単位（90時間）として導入していた．准看護師教育課程において，精神看護学実習を受けた者が全体の60％に留まり，このことは新カリキュラムにおいてその規定がないことや総教育時間数の減少[7]が関係しているものと考える．これらより，本研究における分析対象は，全国平均と比較して，ほぼ平均的な集団といえる．

1）看護学生の対人関係能力と属性，実習経過および各専門分野の看護学臨地実習経験との関連

今回の調査結果において，看護学臨地実習前では准看護師教育課程において精神看護学臨地実習経験のある者がない者よりも看護学臨地実習前の感情処理のスキルおよび攻撃に変わるスキルが低いことが示された．そして，精神看護学実習後には精神看護学臨地実習経験のある者はない者より高度のスキルが低いことが示された．学生にとって，過去の精神看護学臨地実習での施設見学および数日間の患者への援助経験は，高校生という自我が確立する途上段階[8]である未熟さ

に加え，学習内容において看護の専門性に限界[7]があり，わずかに精神保健の観点から対象の現状把握と表面的理解につながったに過ぎないことが考えられる．このようなベースをもって，再度，精神看護学臨地実習に臨む学生は，精神看護学実習経験のない学生とは逆に，患者との関係性において精神疾患患者に対するイメージからくる怖さに向かい合うことが出来るかどうか，あるいは患者や友人，臨床のスタッフとの間に起こったトラブルを上手く処理しながら，実習を乗り越えていけるかといった不安や緊張感[9,10]を高めることにつながったといえ，このことが感情処理のスキルや攻撃に変わるスキルあるいは精神看護学実習後の高度な対人関係のスキルに関係したことが考えられる．いずれにせよ，准看護師教育課程における多様な精神看護学実習の経験が，学生の自己評価の仕方や精神障害者の理解にどのようにつながっているのかを把握しながら，実習場での効果的な指導を考えるべきであろう．

2）看護学臨地実習前と精神看護学実習後との比較およびその特徴

次に，精神看護学実習後では，看護学臨地実習前と比較して対人関係能力が高くなることが示され，中でも，初歩的なスキルと高度のスキルにおいてその変化が見られた．つまり，実習経過に伴って初歩的なスキル，あるいは計画のスキルが変化するという報告[1]に加え，看護学臨地実習前に視野を拡げた場合には，高度のスキルが変化するといえる．すなわち，精神看護学実習修了後の学びとして，自己の思考・感情・行動に気づきながら自分の行動を変容させていく[11]能力を身につけてきていることにより，ケアプランの実施・評価において，患者の主体性を引き出せるよう上手く指示したり，相手の反応を確認したりしながら，自らの気持ちをタイミングよく伝えるという高度のスキルそのものともいえる態度や行動を身につけていることが考えられる．

質問項目別に考察すると，看護学生の臨地実習では，患者だけでなく医療スタッフや周囲の人達のほとんどが初めて出会う他者であり，その他者との「会話を始める」，「会話に参加する」といった初歩的な体験の積み重ねを通じて，複雑な人間関係の中で学習していくという特徴[12]や精神疾患を持つ患者の思いを受容[13]しながらかかわる意味で，「なだめる」という行為が関係したものと考えられる．

以上のように，看護学臨地実習前と精神看護学臨地実習後の社会的スキルの変化および精神看護学実習における学びの特徴をふまえた上で，以後の専門分野看護学臨地実習へと連動させていけるよう，より発展的な教育内容が検討されるべきであろう．

5．本研究における限界と今後の課題

本研究においては，前回の報告[1]と同様，調査対象が一校一教育課程であることには限界があり，やはり，この学年の特性を反映した可能性については否定できない．また，今回，使用した社会的スキル測定尺度の信頼性・妥当性においては，対象数の限界に加え，下位項目別の個人差が影響したとも考えられる．このことから，今後も対象校を教育課程の観点からも増やし，臨地実習の方略を検討する必要がある．

6．結　　論

1）看護学生の看護学臨地実習前および精神看護学実習後の対人関係能力には，准看護師教育課程における精神看護学実習経験が関係しており，実習経験のある方が看護学臨地実習前の感情処理あるいは攻撃に代わるスキルが低く，精神看護学実習後の高度のスキルが低かった．

2）看護学生の対人関係能力は看護学臨地実習前よりも精神看護学実習後が高く，なかでも初歩的なスキルおよび高度なスキルにおいて変化が認められており，他者あるいは周囲との会話に対して意識的に関与しながら実習に取り組んでいた．

謝　　辞

本調査研究にあたり，ご協力いただきました学生・教職員の皆様方に深く感謝いたします．

引用文献

1）日下知子，曽谷貴子，揚野裕紀子：看護学生の対人関係能力に関する研究 ― 精神看護学臨地実習終了後における検討 ―，川崎医療短期大学紀要25：29―34，2005.
2）杉森みど里，舟島なをみ：看護教育学　第4版：医学書院，pp. 256―259，2004.
3）Goldstein AP, Sprafkin RP, Gershaw NJ and Klein P：The adolescent：social skill training through structured learning. Cartledge G and Milburn JF(Eds.), Teaching Social Skills to Children：Pergamon Press, 1986.
4）菊池章夫：思いやりを科学する ― 向社会的行動の心理とスキル ―，東京：川島書店，pp. 187―209，1988.
5）曽谷貴子，揚野裕紀子他：精神看護学カリキュラム変更前

後の比較，平成16年度岡山県看護教育研究会：34—36，2004.
6）滝下幸栄，山田京子，田中美子他：精神看護実習における実習指導計画の検討 ― 指導案展開例の評価から ―，京都府立医科大学医療技術短期大学部紀要 9(2)：273—284，2000.
7）小山眞理子編：看護教育のカリキュラム，東京：医学書院，pp. 159—189，2000.
8）Erik H. Erikson 著，小此木啓吾訳：「自我同一性」アイデンティティとライフサイクル，東京：誠信書房，p. 114，1973.
9）中山和美，寺田眞廣他：看護学生の長期実習前後の心理変化と実習成績に関する研究，昭和医会誌66(1)：29—37，2006.
10）山下満子：臨地実習における学生の不安に関する研究（第3報）― 3年間の追跡調査による実習前の不安内容の変化と教員の関わり方 ―，京都市立看護短期大学紀要27：11—19，2002.
11）川野雅資：精神看護臨地実習，東京：医学書院，pp. 46—51，2005.
12）森田孝子：そもそも臨地実習とは，Nursing Today 20(10)：21—24，2005.
13）上平悦子，上野栄一：精神看護学実習におけるプロセスレコードの分析，奈医看護紀要12：34—39，2006.